

# 志賀重昂『日本風景論』の挿図に関する報告

増野 恵子

志賀重昂著『日本風景論』は1894年に政教社より刊行され、1897年までに十五版を重ねた明治期のベストセラーである。その後長く忘れられていた時代もあったが、1960年代から近代を代表する名著の一冊として再び注目され、今日に至るまで多くの論者がこの書について論じている。

『日本風景論』についてはこれまで様々な考察が行われているが、それらの主旨の代表的なものを列挙すると次のようになる。

1. 啓蒙的地理書
2. 日本の風景を称揚し、そこに日本のアイデンティティを求めたナショナルスティックな書
3. 近代的登山を推奨した啓蒙書
4. 従来の名所概念を脱する新しい風景観をもたらした書
5. 自然環境の保護を訴えた先駆的書

『日本風景論』は一般向けの地理書とも、山岳文学とも随想とも紹介されるが、それは科学から文学に到る多彩な要素がこの著作の中に混在しており、読者の問題意識のあり方によって様々な読みが可能となるからである。

そしてこのうち、4. の新しい風景観をもたらしたという評価は広く認知されているといえよう。小島烏水は、『『風景論』が出てから、従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は、殆ど一蹴された観がある』と述べている。<sup>(1)</sup>これは多分に誇張された表現ではあるが、『日本風景論』は『『風景論』と銘打った邦人の手になる最初の文献<sup>(2)</sup>』であり、伝統的な風景観の変革はこの書をきっかけに始まったという見方は、すでに『日本風景論』論の前提になっているといえる。<sup>(3)</sup>

だが、志賀が新しく提示したとされる風景美あるいは風景観は、本文中では先人の漢詩・俳諧、あるいは志賀自身の美文といったテキストで表されるのみである。よく知られるように、志賀は『日本風景論』の冒

頭において、日本の風景の美を「瀟洒」「美」「跌宕」の三つに分類している。彼はこの分類によって日本の風景に関する美学的な考察を行おうとしたようにも見えるが、それらの語についての定義付けや概念説明は一切なく、彼が各々の概念にふさわしいと考えた情景が短文を連ねて描写されるに過ぎない。

『日本風景論』の主調には日本の風景の賛美・賞揚があり、志賀はこの書を通じて、日本独自の風景美について自覚的であるよう読者に訴えている。彼は読者の中でもとりわけ文人や画家に対して、水蒸気や火山の美を題材にとって作品を作るよう繰り返し呼びかける。<sup>(4)</sup>しかし彼が視覚的にどのような要素をもった風景を美とし、また新しく取り上げるべきテーマと見なしていたのかについては明確にはされない。

風景とはまず視覚によって認識されるものである。見るべき対象を「発見」すること自体が新しいまなざしや認識の存在を示している、とも考えられるが、風景はまず具体的な形象として目に映り、受容する側にそれを美と判断できるだけの基準や経験があつて、はじめてそれが美的な風景であると認識される。彼が新しく見いだした日本風景の美とは具体的にはどのような情景であり、それは彼の中でどのように形象化されていたのだろうか。

そこで本稿では試みに『日本風景論』の挿図に注目した。これまで、挿図について言及あるいは分析を行った先行研究は存在するが、総合的に調査を行った例は管見の範囲では存在しなかった。風景の美を説くこの書で、挿図の果たす役割はそれなりに重要であったはずである。挿図をもあわせて考察することで、『日本風景論』の風景観の特徴が多少なりとも明確になるのではないかという仮説に基づき、今回図版の内容および異同に関し、初版以降の版についても調査を行った。以下、そこで得られた知見を報告する。



図1 志賀重昂『日本風景論』表紙  
(第八版、1897.5刊)

まず、志賀の経歴および『日本風景論』の出版の経緯について簡単に触れておく。<sup>(5)</sup>

志賀重昂(1863～1927)は、三河国岡崎(現在の愛知県岡崎市)に岡崎藩士重職の子として生まれた。号知川。5歳で重職が亡くなり生活が窮乏するが、父の門人の援助を受け1874年上京、攻玉社から東大予備門を経て1880年札幌農学校に入学する。2級上の学年には内村鑑三がいた。1884年に同校を卒業後、長野県中学校に教諭として赴任するが、翌1885年に退職して上京、一時丸善に校正係の職を得る。翌1886年には南洋を巡航する海軍兵学校の軍艦筑波に実地調査の名目で同乗、10か月間オセアニアの各地を視察する。帰国翌年、この時の体験を元に『南洋時事』を執筆、丸善から出版し評判を得た。翌1888年に三宅雪嶺、杉浦重剛、井上円了らとともに政教社を設立する。同年政教社は雑誌『日本人』を創刊するが、志賀はこの雑誌の主筆として、反欧化主義、国粹主義の立場から言論活動を行った。この『日本人』が発禁処分中、誌名を変えて発行されていた『亜細亜』に原型となる論が発表され、後に上梓されたのが『日本風景論』である。

志賀は東京英語学校・東京専門学校で地理学を教えながら、一時は政界へも進出を果たした。農商務省や外務省の官僚に任じられた後、ごく短期間ながら衆議院議員も勤めるが、落選後は政界を退き、以後は世界旅行を行うなどしてその見聞を元に地政学的な旅行記を執筆、出版した。志賀は大学では農学を修め、生涯に文学者、ジャーナリスト、政治家、地理学者として

様々な分野で活動を行い、著作も『河及湖沢』や日露戦争従軍記『大役小志』、その他地理学教科書を各種残している。しかし、今も読み継がれる代表作といえればやはり『日本風景論』に絞られるだろう。

本書は前述のように、政教社の雑誌『亜細亜』第三卷第一号(1893・明治26年12月1日発行)に、「日本風景論」のタイトルで緒論と本論の一部がまず発表された。翌年の同誌第三卷第三号(1894・明治27年10月21日発行)には、「『日本風景論』一節」を副題とした「火口湖」と「玄武岩」の二つの論が掲載され、また同時期に発行された『日本人』(第二次)16号(1894・明治27年10月25日発行)には上記論文と同じ副題を持つ「自然の太妙は変々化々限り無きの間に在り」「石灰岩に於ける浸蝕」の2本が発表される。これらの論文を核に、本論に大幅な加筆を行い、『日本風景論』初版が出版されたのは1894年10月27日のことである。<sup>(6)</sup>

単行書『日本風景論』は、菊判に大和綴じ、表紙には日本各地の風景を描いた挿図が印刷される(図1)。同年夏、朝鮮半島の緊張を契機に日清戦争が始まり、愛国的な風潮が社会に高まっていたこともあってか『日本風景論』は刊行当初から大変好調な売れ行きを見せたようである。第四版までは2～3か月おきに重版が繰り返され、その後のペースは落ち着くが、最終的に十五版を重ねた。売れ行きとあわせて社会的な反響も大きく、新聞や雑誌はこぞって『日本風景論』の書評を掲載した。それらの主要なものは別立ての色刷り頁とされ、巻頭あるいは巻末に収載されただけでなく、志賀が感じ入った2、3の評は序文にかえて掲載された。改版分についても書評が書かれており、それらは後の版で別刷り頁にあわせて掲載されている。

次にその内容の概略を記す。一から九までの章立てがされ、一が序論、二～五が本論にあたり、六～八は日本の風景に関して為される提言で、九に雑感がまとめられる。以下、本書の核を為していると考えられる一から八までの章について言及する。

まず一の「緒論」において、志賀は大槻盤溪の漢詩から「江山洵美是吾郷」の句を引用し、誰もが故郷の美しさを語るがそれはあくまで観念上のことに過ぎない、しかし日本人が日本の風景の美しさを語るのは、それが我が故郷であるからではなく、日本の風景が世界の中でも絶対的に美しいからである、と断言する。

そして日本の風景の美しさを「瀟洒」「美」「跌宕」（ここでは雄大でおおらかな様の意）という3点に集約し、続いてこの風景美を生み出す要因を次の4点に見いだす。

- 一、日本には気候、海流の多変多様なる事
- 二、日本には水蒸気の多量なる事
- 三、日本には火山岩の多々なる事
- 四、日本には流水の浸蝕激烈なる事

そして続く二以下の本論で、これらの特質を順に説明していく。

一の気候、海流の多様性は、本論中最も記述量が少なく、気候や海流より日本における生物の多様性、なかでも鳥と花について述べる内容が主である。また二の水蒸気の項では、日本各地の気候の変化を春夏秋冬に分けて取り上げ、水蒸気によって生じた美しい情景の描写を行うとともに、奇であり「跌宕」である光景の例として、蜃気楼、台風、岩石の浸蝕が紹介される。

しかし、上記の特徴の中で最も力点が置かれている記述は三の火山岩の項目である。志賀は日本の風景美の主因を火山に求め、火山のない朝鮮や中国の風景の変化の乏しさを強調する。比較対象はアジアの隣国だけでなくイギリス、あるいは欧州の列強各国にも及び、それらの地域にも存在しない「造化の洪炉<sup>(7)</sup>」火山を多数擁する日本の風景美がいかにすぐれているかを主張する。あわせて志賀は、「名山とは火山の別称<sup>(8)</sup>」とまでいい、就中富士山を名山中の名山として賞揚する。ただし以上の激烈な賞賛は冒頭と末尾に置かれ、本文のほとんどでは日本各地の各火山山系に属する山々について標高、山容の特徴など事実を淡々と述べるに留めている。この項ではまた各地の火口湖と、玄武岩から生じた奇観の実例を紹介している。

この直後に、「付録」として「登山の気風を興作すべし」の章が置かれる。この付録部分の挿入は、構成からいってもやや唐突な感否めない。だが、火山の雄大さを美文を尽くして描写した前段からの流れによって、読者は登山へと誘われることになる。ここでは登山にあたっての準備と諸注意、そして花崗岩からなる各地の山への行程などが記され、一種の登山ガイドとして読めるようになっている。

最後に、それぞれ異なる性質の地質が浸蝕されてきた奇勝について、火山岩、花崗岩、石灰岩などに分類しながら、各地の実例を挙げ詳述する。

日本の風景に関する解説は以上で終わり、六～八で

は、志賀は再び熱狂的な調子を取り戻して読者に呼びかける。火山に代表される日本独自の風景美に文人や画家はもっと目を向け、新たな版図となるであろう台湾の玉山、山東半島の泰山にも「台湾富士」「山東富士」の名称を冠して、新たな題材とすべしと述べ<sup>(9)</sup>、また日本のシンボルたる豊かな風景を破壊することは日本の未来の人文を破壊することであるとして自然保護を唱え<sup>(10)</sup>、地理学においては欧米発ではなく日本発祥の新術語（概念）をもってアジア大陸の地質を研究し、世界にその成果を承認させるよう檄を飛ばして文を結ぶ。

以上のように、『日本風景論』には、日本の風景を科学的な知識を援用しつつ見直し、火山や奇巖に新しい美を見いだす論と、その美意識を世界に敷衍し、火山に代表される日本の風景美がアジアや欧米をも凌ぐ世界に冠たるものであるという国粹主義的な主張が一貫して流れているといえる。

『日本風景論』の記述は、即物的な記述と、彼自身の漢詩文の素養に基づく美文による極めて情緒的な情景描写、そして俳諧・漢詩・和歌の引用といった全く性格の異なる文章が交互に現れる混沌としたスタイルを取っており、論旨を直線的に追うのは難しい。しかし本書の構造を見れば、志賀は日本の個々の風景美を語ったのではなく、日本の風景をある概念によって整理し、提示しようとしたと考えられる。

ではその概念とはどのようなものであったのか。彼が美と見なした風景については、「緒論」で「瀟洒」「美」「跌宕」という言葉によって語られる。だが「瀟洒」「美」「跌宕」の定義や説明は一切行われず、ただこれらの概念を典型的に表しているとされる情景描写が列記される。

例えば「瀟洒」では「脩竹三竿、詩人の家、梅花百株、高士の宅、これ欧米諸国にありて絶えて見る能はざるの景物<sup>(12)</sup>」、「美」では「緑楊は煙の如く画の如く名古屋城中を籠め、楼阁高低その間に隠見す<sup>(13)</sup>」という情景が例に挙げられる。それぞれ9あるいは10の情景が描かれ、各概念について説明のかわりとされているが、これらはいずれも文人画の画題にふさわしい、絵画的な情景であるといえる。

一方、「跌宕」にもこのような情景描写が列記されるが、そこに表されるのは伝統的な画題とはいささか異なる風景のようである。例えば、「万頃の太平洋面、笄岩（洋客は『ロットの妻』と称す、基督教経典のいは



図2 樋畑雪湖画「高千穂峯（東霧島山）韓国嶽（西霧島山）」（『日本風景論』第八版挿図）



図3 樋畑雪湖画「カモイコタン」（『日本風景論』第八版挿図）

ゆるロットの妻女天命を犯し上帝の罰を蒙りて塩の柱に化す云々より斯く附名せしもの、岩は八丈島と小笠原列島との間、大太平洋上にあり）峭起し、雪浪これに怒撃し、一隻の信天翁双翼を張りて岩頂に佇立す<sup>(14)</sup>と表現された例を見れば、雄渾、壮大だが同時に凄みある荒涼とした風景に美を見いだしている様子がうかがえる。

以上のように、三つの概念は各々独立したものとして提示されるが、それ以上本質的な論には到っていない。各概念を示すものとして挙げられた情景描写はいずれも感覚や情緒に訴えかけてくるが、それ自体が概念を説明するものではない。志賀の考える美が独立して語られる部分はここだけで、以降は各地の個々の風景を語る中で、個別の風景に対して美的であるとの判断が為されるのみである。

そこで稿者は志賀が語ろうとした新しい風景美がどのように視覚化されているかについて考える前提として、図版に関する基礎的な情報を把握することとした。

『日本風景論』は改版の度に表紙画が差し替えられている。それは十四版まで続いたが、十五版に到って造本がクロス装へと改められ、それによって表紙画は消滅した。しかし、版によっては表紙画だけでなく本文中の挿図にも異同が見られることが分かり調べたところ、改版の度に図版が追加されていることが判明した。そこで初版から十五版までの各版に掲載された図版

（九、十一、十二版を除く）について調査を行い、データをまとめた<sup>(15)</sup>。図版の異同は表1（p.108～112）のとおりである。各版毎に掲載された図版を掲載頁・タイトル・作者・製版を行った彫師の順にまとめ、新たに追加された図については、該当する欄に網掛けを施している。

このような一覧をまとめてみたところ、まず目につくのは挿図の増加である。初版においては挿入図版の総数は全24点であるのに対し、最終版の第十五版では挿図の点数が51点とほぼ倍増している。図版の点数は、改版ごとに1ないし2点のペースで増やされているが、第四・五版だけは例外的にそれぞれ4点と8点の図が一度に追加されている。

志賀は挿図を書いた2人の画家について、1894年10月18日の日付の入った謝辞を『日本風景論』の巻頭に掲げている。それによれば、この本の挿図を描いたのは信州松代出身の樋畑雪湖、そして志賀と同じ参州拳母出身の海老名明四である。樋畑は伝統絵画、海老名は洋風画のスタイルでそれぞれ挿図を担当したとされる。彼らは2人とも志賀の知人であったようで、志賀が2人に制作を依頼し、両人ともそれを快諾し、挿図を描いたという<sup>(16)</sup>。

ここに挙げた樋畑雪湖（正太郎）（1858～1943）は逓信省に出仕した官員である。雪湖は幼少期から青年期にかけ、酒井雪谷、次いで富岡奇雪と川上冬崖に師事し、伝統絵画と洋画の両方を学んでいる。逓信省で



図4 海老名明四(?)画「玄武洞」(『日本風景論』第八版挿図)

はその画技を活かして記念切手や日露戦争記念の官製絵葉書のデザインを担当した<sup>(17)</sup>。もう1人の海老名明四は、のちに東京美術学校西洋画科に入学する洋画家である。<sup>(18)</sup>『日本風景論』刊行当時、フランスから帰朝したばかりの黒田清輝が、外光を意識した明るい色調の作風と、裸体画という新しい主題によって日本の洋画界に衝撃を与えていた。黒田は後に白馬会を結成し、美術界での影響力を増していくが、海老名が加わっていたのは「新派」と通称された白馬会ではなく、彼らに対して「旧派」と称された明治美術会である。<sup>(19)</sup>「旧派」の絵画は、一般に茶や黒といった落ち着いた色彩を多用し、写実性を重視する傾向が強かった。おそらく彼もそのような傾向をもった作品を描いていたのではないと思われる。

『日本風景論』初版の挿図は樋畑雪湖が12点、海老名明四が5点を描いたと考えられ、その他『地学雑誌』からの引用図版が5点、「松僊」の落款のある図が1点、画者不明の図が1点の計24点となっており、挿図中、樋畑雪湖の「駒ヶ嶽」が表紙にも用いられる。2人の挿図を比較すると、樋畑雪湖は空間の表現などに西洋画の影響が見られるものの、高い俯瞰構図をとり、山の全景をとらえる伝統的な山水画の視点をとっているのに対し(図2・3)、海老名は岩石が浸蝕されてできた岩の形態そのものに焦点を当てて、それらを写真的な再現描写によって描いており全く対照的である(図4)。伝統絵画の構図と様式で描かれた図は14点、西洋画の手法を用いて描かれた図(スケッチを含む)は8点となっており、伝統的な絵画様式で描かれた挿図の方が多く、この傾向は後の版でも変わらない。

なおこれらの図はいずれも木口木版によって制作さ



図5 中村不折画「越ヶ谷附近の春色」(『日本風景論』第八版挿図)

れている。木口木版は、日本で永く主流となっていた板目木版と比べ、細密表現に適している。海老名明四の挿図に見られる写真的な表現は、まさに木口木版の特徴をよく表わしている。一方、同じ木口木版でも樋畑雪湖の挿図では海老名明四のような細密描写は行われておらず、各々原画の様式を反映した仕上がりとなっている。

そして第三版(1894年2月)には、あらたに洋画家中村不折(1866~1943)の描く挿図が追加された<sup>(21)</sup>(図5)。彼がこの挿図を描くに至った経緯は不明であるが、不折は志賀の所属する政教社が発行する雑誌『日本人』と協力関係にあった新聞『日本』紙上で1894年から挿絵を描いており、そこから志賀との関係が生まれた可能性がある。これらの挿図は、目に映る風景をそのまま切り取ったかのような伸びやかさをもっており、初版から挿図を手がけている樋畑雪湖の伝統絵画の定型に従った作風や、海老名明四の緻密な画風とは大きく異なっている。

この時、美術界では、従来の名所図や山水図の視覚に縛られることのない新しい風景画が若い画家たちによって描き始められていた。「風景画」の語が成立するのは1895年前後のこととされるが、<sup>(23)</sup>それより早く、洋画家小山正太郎が主宰する画塾不同舎の生徒たちは、連れ立って山野に向かい、自分の目に映った風景をスケッチに残している。不折もまた、信州の飯田から上京して1888年に小山の不同舎に学び、野外スケッチを行った。<sup>(24)</sup>火山の美を称揚し、登山を勧める書にふさわしい風景は、むしろ不折の作品中にあるようにも思われるが、第六版以降追加された挿図はすべて樋畑雪湖の手になるものであった。なぜ後の版に不折や海老名



図6 中村不折画「鬼通路」(『日本風景論』第八版挿図)

明四の挿図が追加されなかったのかは不明である。第十五版の挿図の制作点数を見ると、樋畑雪湖の画は49点中27点と過半数を占めている。また伝統絵画のスタイルで描かれた図は29点、西洋画の手法を用いて描かれた図(スケッチを含む)は15点と伝統的スタイルで描かれた挿図が洋画を圧倒している。

『日本風景論』の挿図に関しては更なる分析と検討が必要である。しかし、このような伝統絵画と西洋画の極端な偏りを見るならば、従来指摘される、新しい風景の美を唱えながら、伝統的な美意識に縛られた志賀の折衷的な感性が、図版の選択の面にも示されている可能性があるといえるだろう。

併せて、これらの図版が本文中のどの章で言及された風景を絵画化したものか確認した。その結果、初版から十五版までの挿図に、二の気候、海流の多様性に対応する図版はないことが分かった(表1の第十五版参照)。その他の章は、初版について見ると三の水蒸気に関係する記述に対応する図は1点、四の火山岩の章に対応する図は5点、付録に対応する図版(花崗岩)は1点、五の流水の浸蝕に対応する図は10点となり、絵画化された風景は四の火山岩と五の流水の浸蝕に偏っていることが分かる。第十五版の図版51点についても本文の記述との対応関係を調べたが、その結果、火山岩が16点、流水の浸蝕が18点と同様の傾向が見られた。

以上の点から、『日本風景論』の挿図はどの版においても火山岩と流水の浸蝕によってつくられた奇観を視覚化することに焦点が置かれていることが分かる。先に、志賀は火山の美に多くの頁を割いて語っていることを見た。同様に、彼は挿図においても、「瀟洒」「美」につながる水蒸気や海流ではなく、火山岩や流水の浸



図7 中村不折(?)画「台南の風景」(『日本風景論』第八版挿図)

蝕によって生まれた「跌宕」の美を紹介することに入れ替えていたことが、この調査の結果からはっきりと見てとれるのである。

最後に、追加図版から見いだせるその他の問題点を指摘しておきたい。第五版(1895年8月)には中村不折画の「鬼通路」「礮馭盧島ノ春色」「圓月洞」「稜盾岨」と折り込み図「台南の風景」(表)「台北の風景」(裏)<sup>(25)</sup>が追加された(図6~7)。この版で追加された図版のいくつかは、実は本文中の加筆にあわせたものである。例えば「鬼通路」は、第四版で「五 日本には流水の浸蝕激烈なる事」の「(四)各岩の浸蝕に伴へる雑多の結果」に鬼通路の記述が追加され、それに対応して第五版で新たに追加されたものである。

この年の4月、日清戦争終戦に伴って締結された下関条約により、台湾の割譲が決まっている。第五版で追加された折り込み図「台南の風景」「台北の風景」は、対応する加筆部分こそ本文にはないが、新たな領土となる台湾を日本の風景美の中に練り込むべく、追加されたものと考えられる。「台北の風景」図中の解説文には次のようにある。「火山岩の磊落峭拔して洋水の怒激浸蝕する所、宛として日本版図内の地。目を衝くの山、胸を盪すの洋海、豈に不朽の文、不朽の詩、不朽の画、不朽の刻作、此間に発せざらん哉」。このように、気候風土の異なる地域に火山岩と流水の浸蝕により造られた風景を発見し、そこに強引に日本の風景を重ねあわせるという一種の転倒がここには生じている。第四版

から五版に見られる挿図の異同を把握していなければ、この図のアクチュアルな意味を読みとることはできないのではないだろうか。

『日本風景論』の「緒論」にある風景美の3つの概念は、再版から追加された事は既によく知られている。しかし今回の調査の結果を見るならば、本文と挿図の版ごとの変化には、もっと深く読み込むべきものがあると思われる。門人の後藤狂夫によれば、志賀は「堅く著者の徳義を重んじ、改版の都度必ず完膚なきまでの訂正改竄を加」え、そのため紙型を再利用できない出版社は多くの利潤を得られず、志賀自身の印税も十分ではなかったという。しかも、一定の年月が経ち、内容が既に古くなったと判断した著作は絶版にしていたという。度重なる改稿は、志賀が同時代の批評を素直に受け止めた結果で、彼の良心的態度を示しているとされる。<sup>(27)</sup>その動機はどうか、『日本風景論』は、志賀の改訂作業により、版ごとにその姿を変容させていると考えられる。

冒頭に述べたように、『日本風景論』はとらえどころのない多面性をもっている。一見科学的に見えながら、説明に論理的な飛躍が見られるなど純然たる地理書とは見なしがたく、また内容においても、地理学、生物

学、随想、名所図絵、旅行ガイドといった種々雑多な要素を併せ持っており、かろうじて著者の主張は把握できるが、その全体像は極めて曖昧であるといえる。『日本風景論』の捉えにくさを、米地文夫氏はその「キマイラの性格」にあると断じている。<sup>(28)</sup>つまりこの書は、《獅子の頭》＝「科学的装い」、《牡山羊の胴体》＝古典的詩歌美文、《竜の尾》＝登山の奨め、《山羊の口から吐く炎》＝「国粹主義・反清国の檄」からなる奇怪なキマイラ的書物であるというのである。この評は当時の知識人の好尚に適う様々な要素が盛り込まれたこの書に対する的確な分析であり、今日までこの書の生命を生きながらえさせてきた、多様な読みを許容する曖昧さの本質を指摘しているといえよう。稿者は米地氏の分析した特徴に加え、今回の調査で判明したように、改版時の加筆訂正によりその内容が版ごとにわずかずつ変化している事も、本書の性格の曖昧さの一因となっているのではないかと考える。

今後『日本風景論』について考えるには、少なくともこの書の形が固まる第五版まで、その記述（図版も含む）がどのように変化していったかを検討することが必要であると考え、ひとまず本稿では挿図の異同について報告するに留める。

（ましの・けいこ）

表1 『日本風景論』挿図異同一覧

【凡例】

- ・ 頁数の表記がない図版は、前後の頁数を記して掲載箇所を示した。
- ・ 新たに追加された図版には網かけを施した。
- ・ 画風によって作者を特定した場合は [ ] を用いて示した。
- ・ 「本文の記述」では挿図に描かれた風景に言及した箇所を岩波文庫版(1995)によって示した。
- ・ 「該当する節」では挿図に描かれた風景の言及箇所を各節の見出しによって分類した。また図版の解説文から該当節を判断した場合は [ ] を用いて示した。

初版 (M. 27.10)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	駒ヶ嶽	樋畑雪湖	
扉	一 鉉懸岩 (後志奥尻島) 二 沖縄 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
扉裏	寢覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.70-71表	吾妻富士	[『地学雑誌』]	
p.70-71裏	吾妻山大穴	[『地学雑誌』]	
p.76-77表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.76-77裏	浅間山ノ噴煙	[『地学雑誌』]	
p.100-101表	樽前山ノ浅間山	樋畑雪湖	
p.100-101裏	諏訪湖	樋畑雪湖	
p.106-107表	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	A. Y
p.106-107裏	玄武洞	[海老名明四]	
p.158	武甲山	[『地学雑誌』]	
p.160-161表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.160-161裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.172-173表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.172-173裏	岡崎城	松僊	
p.178-179表	泥柱	樋畑雪湖	
p.178-179裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.184-185表	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.184-185裏	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
[ノンプルなし]	[海岸図]		

三版 (M.28.2)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
扉	一 鉉懸岩 (後志奥尻島) 二 沖縄 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.74-75表	吾妻山大穴	[『地学雑誌』]	
p.74-75裏	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.106-107表	諏訪湖	樋畑雪湖	
p.106-107裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.112-113表	田代ノ七ッ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.112-113裏	玄武洞	[海老名明四]	
p.114-115表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.114-115裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	A. Y
p.166-167表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.166-167裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.169	武甲山	[『地学雑誌』]	
p.170	浅間山ノ噴煙	[『地学雑誌』]	
p.176-177表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.176-177裏	岡崎城	松僊	
p.188-189表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.188-189裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.190-191表	五剣山	樋畑雪湖	
p.190-191裏	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.200-201表	吾妻富士	[『地学雑誌』]	
p.200-201裏	樽前山ノ浅間山	樋畑雪湖	
[ノンプルなし]	[海岸図]		
[ノンプルなし]	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

再版 (M. 27.12)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
扉	一 鉉懸岩 (後志奥尻島) 二 沖縄 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.74-75表	吾妻山大穴	[『地学雑誌』]	
p.74-75裏	吾妻富士	[『地学雑誌』]	
p.106-107表	諏訪湖	樋畑雪湖	
p.106-107裏	樽前山ノ浅間山	樋畑雪湖	
p.112-113表	田代ノ七ッ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.112-113裏	玄武洞	[海老名明四]	
p.114-115表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.114-115裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	A. Y
p.163	武甲山	[『地学雑誌』]	
p.164	浅間山ノ噴煙	[『地学雑誌』]	
p.166-167表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.166-167裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.176-177表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.176-177裏	岡崎城	松僊	
p.188-189表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.188-189裏	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.190-191表	五剣山	樋畑雪湖	
p.190-191裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.200-201表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.200-201裏	寢覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
[ノンプルなし]	[海岸図]		

四版 (M.28.5)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	カモイコタン	樋畑雪湖	
扉	一 鉉懸岩 (後志奥尻島) 二 沖縄 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7裏	穴道湖	樋畑雪湖	
p.62-63表	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.62-63裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.80-81表	樽前山ノ浅間山	樋畑雪湖	
p.80-81裏	吾妻富士	[『地学雑誌』]	
p.112-113表	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.112-113裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119表	田代ノ七ッ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	[『地学雑誌』]	
p.170	浅間山ノ噴煙	[『地学雑誌』]	
p.172-173表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.178-179表	寢覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.178-179裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.182-183表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183裏	岡崎城	松僊	
p.200-201表	泥柱	樋畑雪湖	
p.200-201裏	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.204-205表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.210-211表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211裏	吾妻山大穴	[『地学雑誌』]	
[ノンプルなし]	[海岸図]		
[ノンプルなし]	越ヶ谷附近の春色	中村不折	



五版 (M.28.8)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	妙義山第二石門	樋畑雪湖	
扉	一 鉦懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7裏	宍道湖	樋畑雪湖	
p.62-63表	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.62-63裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.80-81表	樽前山/浅間山	樋畑雪湖	
p.80-81裏	吾妻富士	『地学雑誌』	
p.112-113表	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.112-113裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119表	田代ノ七ツ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	『地学雑誌』	
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』	
p.172-173表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.178-179表	寝覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.178-179裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.182-183表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183裏	岡崎城	松僊	
p.192-193表	鬼通路	中村不折	
p.192-193裏	礮取盧島ノ春色	中村不折	
p.198-199表	圓月洞	中村不折	
p.198-199裏	稜盾嶺	中村不折	
p.200-201表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.200-201裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.204-205表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.206-207表	台南の風景	[中村不折]	
p.206-207裏	台北の風景	[中村不折]	
p.210-211表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211裏	吾妻山大穴	『地学雑誌』	
[ノンブルなし]	[海岸図]		
[ノンブルなし]	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

六版 (M.29.6)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	飛騨ノ山中	樋畑雪湖	
扉	一 鉦懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7裏	宍道湖	樋畑雪湖	
p.62-63表	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.62-63裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.80-81表	樽前山/浅間山	樋畑雪湖	
p.80-81裏	吾妻富士	『地学雑誌』	
p.112-113表	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.112-113裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119表	田代ノ七ツ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	『地学雑誌』	
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』	
p.170-171表	飛騨ノ山中	樋畑雪湖	森山天葩
p.172-173表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.178-179表	寝覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.178-179裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.182-183表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183裏	岡崎城	松僊	
p.192-193表	鬼通路	中村不折	
p.192-193裏	礮取盧島ノ春色	中村不折	
p.198-199表	圓月洞	中村不折	
p.198-199裏	稜盾嶺	中村不折	
p.200-201表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.200-201裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.204-205表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.206-207表	台南の風景	[中村不折]	
p.206-207裏	台北の風景	[中村不折]	
p.210-211表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211裏	吾妻山大穴	『地学雑誌』	
[ノンブルなし]	[海岸図]		
[ノンブルなし]	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

七版 (M.29.12)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	高千穂峯 韓国嶽	樋畑雪湖	
扉	一 鉉懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7裏	宍道湖	樋畑雪湖	
p.62-63表	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.62-63裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.80-81表	樽前山/浅間山	樋畑雪湖	
p.80-81裏	吾妻富士	『地学雑誌』	
p.112-113表	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.112-113裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119表	田代ノ七ッ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	『地学雑誌』	
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』	
p.170-171表	飛騨ノ山中	樋畑雪湖	森山天葩
p.172-173表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.176-177表	寝覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.176-177裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.182-183表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183裏	岡崎城	松僊	
p.192-193表	鬼通路	中村不折	
p.192-193裏	礮馱盧島ノ春色	中村不折	
p.198-199表	圓月洞	中村不折	
p.198-199裏	稜盾嶺	中村不折	
p.200-201表	泥柱	樋畑雪湖	
p.200-201裏	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.204-205表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.206-207表	台南の風景	[中村不折]	
p.206-207裏	台北の風景	[中村不折]	
p.210-211表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211裏	吾妻山大穴	『地学雑誌』	
[ノンブルなし]	[海岸図]		
p.2	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

八版 (M.30.5)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	俵岩	樋畑雪湖	森山天葩
扉	一 鉉懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7裏	宍道湖	樋畑雪湖	
p.62-63表	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.62-63裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.80-81表	樽前山/浅間山	樋畑雪湖	
p.80-81裏	吾妻富士	『地学雑誌』	
p.106-107表	俵岩	樋畑雪湖	森山天葩
p.106-107裏	高千穂峯 韓国嶽	樋畑雪湖	
p.112-113表	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.112-113裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119表	田代ノ七ッ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	『地学雑誌』	
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』	
p.170-171表	飛騨ノ山中	樋畑雪湖	森山天葩
p.172-173表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.178-179表	寝覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.178-179裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.182-183表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183裏	岡崎城	松僊	
p.192-193表	鬼通路	中村不折	
p.192-193裏	礮馱盧島ノ春色	中村不折	
p.198-199表	圓月洞	中村不折	
p.198-199裏	稜盾嶺	中村不折	
p.200-201表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.200-201裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.204-205表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.206-207表	台南の風景	[中村不折]	
p.206-207裏	台北の風景	[中村不折]	
p.210-211表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211裏	吾妻山大穴	『地学雑誌』	
[ノンブルなし]	[海岸図]		
p.2	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

十版 (M.32.8)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	石見の海岸及鶴島	樋畑雪湖	
扉	一 鉦懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7裏	宍道湖	樋畑雪湖	
p.62-63表	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.62-63裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.80-81表	樽前山/浅間山	樋畑雪湖	
p.80-81裏	女阿寒嶽ノ最高点・男阿寒嶽	樋畑雪湖	森山天葩
p.108-109表	高千穂峯 韓国嶽	樋畑雪湖	
p.108-109裏	吾妻富士	『地学雑誌』	
p.112-113表	石見の海岸及鶴島	樋畑雪湖	
p.112-113裏	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.112-113表	俵岩	樋畑雪湖	森山天葩
p.112-113裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119表	田代ノ七ツ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	『地学雑誌』	
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』	
p.172-173表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.178-179表	寢覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.178-179裏	小野嶽	樋畑雪湖	
p.182-183表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183裏	岡崎城	松僊	
p.192-193表	鬼通路	中村不折	
p.192-193裏	蝦取盧島ノ春色	中村不折	
p.198-199表	圓月洞	中村不折	
p.198-199裏	稜盾峯	中村不折	
p.200-201表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.200-201裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.204-205表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.206-207表	台南の風景	[中村不折]	
p.206-207裏	台北の風景	[中村不折]	
p.210-211表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211裏	吾妻山大穴	『地学雑誌』	
[ノンブルなし]	[海岸図]		
p.2	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

十三版 (M.35.4)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	川合ノ切通	樋畑雪湖	
扉	一 鉦懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7裏	宍道湖	樋畑雪湖	
p.62-63表	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.62-63裏	五剣山	樋畑雪湖	
p.80-81表	樽前山/浅間山	樋畑雪湖	
p.80-81裏	女阿寒嶽ノ最高点・男阿寒嶽	樋畑雪湖	森山天葩
p.82-83表	岩尾ノ瀧	樋畑雪湖	森山天葩
p.82-83裏	岩木山	樋畑雪湖	
p.108-109表	高千穂峯 韓国嶽	樋畑雪湖	
p.108-109裏	吾妻富士	『地学雑誌』	
p.112-113表	石見の海岸及鶴島	樋畑雪湖	
p.112-113裏	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.112-113表	俵岩	樋畑雪湖	森山天葩
p.112-113裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119表	田代ノ七ツ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	『地学雑誌』	
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』	
p.170-171表	飛騨ノ山中	樋畑雪湖	森山天葩
p.172-173表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.178-179表	小野嶽	樋畑雪湖	
p.178-179裏	寢覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.182-183表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183裏	岡崎城	松僊	
p.192-193表	蝦取盧島ノ春色	中村不折	
p.192-193裏	鬼通路	中村不折	
p.198-199表	圓月洞	中村不折	
p.198-199裏	稜盾峯	中村不折	
p.200-201表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.200-201裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.204-205表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.206-207表	台南の風景	[中村不折]	
p.206-207裏	台北の風景	[中村不折]	
p.210-211表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211裏	吾妻山大穴	『地学雑誌』	
[ノンブルなし]	[海岸図]		
[ノンブルなし]	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

十四版 (M.35.4)			
掲載箇所	タイトル	画者	彫版
表紙	利尻山	樋畑雪湖	
扉	一 鉾懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y
p.6-7 表	桜島	樋畑雪湖	
p.6-7 裏	穴道湖	樋畑雪湖	
p.20-21 表	石見の海岸及鶴島	樋畑雪湖	
p.20-21 裏	対馬ノ海岸	樋畑雪湖	
p.60-61 表	五剣山	樋畑雪湖	
p.60-61 裏	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩
p.76-77 表	女阿寒嶽ノ最高点・男阿寒嶽	樋畑雪湖	森山天葩
p.76-77 裏	樽前山ノ浅間山	樋畑雪湖	
p.82-83 表	岩尾ノ瀧	樋畑雪湖	森山天葩
p.82-83 裏	岩木山	樋畑雪湖	
p.106-107 表	吾妻富士	『地学雑誌』	
p.106-107 裏	高千穂峯 韓国嶽	樋畑雪湖	
p.112-113 表	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩
p.112-113 裏	俵岩	樋畑雪湖	森山天葩
p.118-119 表	田代ノ七ッ釜	[海老名明四]	森山天葩
p.118-119 裏	玄武洞	[海老名明四]	A. Y
p.120-121 表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]	森山天葩
p.120-121 裏	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]	
p.169	武甲山	『地学雑誌』	
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』	
p.170-171 表	飛騨ノ山中	樋畑雪湖	森山天葩
p.172-173 表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]	
p.172-173 裏	耶馬溪	[中村不折]	
p.178-179 表	小野嶽	樋畑雪湖	
p.178-179 裏	寝覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀
p.182-183 表	駒ヶ嶽ノ小野ノ瀧	樋畑雪湖	
p.182-183 裏	岡崎城	松僊	
p.192-193 表	礮馭盧島ノ春色	中村不折	
p.192-193 裏	鬼通路	中村不折	
p.194-195 表	川合ノ切通	樋畑雪湖	
p.194-195 裏	利尻山	樋畑雪湖	
p.198-199 表	圓月洞	中村不折	
p.198-199 裏	稜盾崑	中村不折	
p.200-201 表	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]	
p.200-201 裏	泥柱	樋畑雪湖	
p.204-205 表	カモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩
p.204-205 裏	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖	
p.206-207 表	台南の風景	[中村不折]	
p.206-207 裏	台北の風景	[中村不折]	
p.210-211 表	吾妻山ノ噴煙	[写真]	
p.210-211 裏	吾妻山大穴	『地学雑誌』	
[ノンブルなし]	[海岸図]		
[ノンブルなし]	越ヶ谷附近の春色	中村不折	

十五版 (M.36.6)					
掲載箇所	タイトル	画者	彫版	本文の記述	該当する節
表紙	富士に松				
扉	一 鉾懸岩 (後志奥尻島) 二 沖繩 三 榕樹 四 彦山 (豊前、豊後)	[海老名明四]	A. Y		
[ノンブルなし]	月ヶ瀨の梅花	樋畑雪湖		p.287	花崗岩における浸蝕
p.8-9 表	理想上の日本 美なる我国土	樋畑雪湖			
p.8-9 裏	妙義山第二石門	樋畑雪湖	森山天葩	p.135	中部日本の火山
p.20-21 表	田代ノ七ッ釜	[海老名明四]	森山天葩	p.182	玄武岩
p.20-21 裏	小野ノ瀧	樋畑雪湖		p.289	花崗岩における浸蝕
p.40-41 表	榛名山葛籠岩	[海老名明四]		p.268	火山岩における浸蝕
p.40-41 裏	泥柱	樋畑雪湖		p.312	海水の浸蝕
p.48-49 表	石見の海岸及鶴島	樋畑雪湖			海水の浸蝕
p.48-49 裏	岩尾ノ瀧	樋畑雪湖	森山天葩		
p.80-81 表	吾妻山ノ噴煙	[写真]		p.119	本州東北の火山
p.80-81 裏	諏訪湖	樋畑雪湖	森山天葩	p.176	火口湖
p.96-97 表	材木石ノ末ノ松山波打峠	[海老名明四]		p.180 / p.312	玄武岩ノ海水の浸蝕
p.96-97 裏	駒ヶ嶽	樋畑雪湖		p.244	花崗岩の山岳
p.112-113 表	芥屋ノ大門窟	[海老名明四]		p.183	玄武岩
p.112-113 裏	桜島	樋畑雪湖	森山天葩	p.167	南日本の火山
p.124-125 表	俵岩ノカモイコタン	樋畑雪湖	森山天葩	p.187 / p.318	玄武岩ノ日本の文人…に寄語す
p.124-125 裏	岡崎城	松僊			
p.136-137 表	玄武洞	[海老名明四]	A. Y	p.183	玄武岩
p.136-137 裏	穴道湖	樋畑雪湖			
p.170-171 表	飛騨ノ山中	樋畑雪湖	森山天葩		
p.152-153 表	岩木山	樋畑雪湖		p.124	本州東北の火山
p.152-153 裏	小野嶽	樋畑雪湖			[火山岩における浸蝕]
p.160-161 表	川合ノ切通	樋畑雪湖		p.298	石灰岩における浸蝕
p.160-161 裏	寝覚ノ床	樋畑雪湖	武井刀	p.278	花崗岩における浸蝕
p.169	武甲山	『地学雑誌』			
p.170	浅間山ノ噴煙	『地学雑誌』			
p.170-171 表	女阿寒嶽ノ最高点・男阿寒嶽	樋畑雪湖		p.106 / p.109	北海道本島の火山
p.170-171 裏	樽前山ノ浅間山	樋畑雪湖		p.109 / p.133	北海道本島の火山ノ中部日本の火山
p.176-177 表	利尻山	樋畑雪湖			
p.176-177 裏	二見浦夫婦岩ノ冬島	[樋畑雪湖]		p.311 / p.312	海水の浸蝕ノ海水の浸蝕
p.184-185 表	鬼通路	中村不折		p.303	流水の浸蝕
p.184-185 裏	礮馭盧島ノ春色	中村不折			
p.192-193 表	高千穂峯 韓国嶽	樋畑雪湖		p.170	南日本の火山
p.192-193 裏	圓月洞	中村不折	武井刀		[海水の浸蝕]
p.200-201 表	対馬ノ海岸	樋畑雪湖		p.309	海水の浸蝕
p.200-201 裏	稜盾崑	中村不折			[海水の浸蝕]
p.216-217 表	五剣山	樋畑雪湖		p.80	岩石の霽散
p.208-209 表	台南の風景	[中村不折]			
p.208-209 裏	台北の風景	[中村不折]			
p.216-217 裏	耶馬溪	[中村不折]		p.269	火山岩における浸蝕
p.224-225 表	吾妻山大穴	『地学雑誌』		p.119	本州東北の火山
p.224-225 裏	吾妻富士	『地学雑誌』		p.119	本州東北の火山
[ノンブルなし]	[海岸図]				
[ノンブルなし]	越ヶ谷附近の春色	中村不折			

## 【注】

- (1) 小島 1995：371。
- (2) 勝原 1979：89。
- (3) 例えば千田（1998）に収載の対談「風景を思う、えがく、つくる」（高橋徹十千田稔）における千田の発言（230-231）や森谷（2002：44）など。
- (4) 「然れども日本の歌人は単に『山』として火山岩の山岳若くは活火山を吟詠し、若くは風をこれに寄托せしのみにて、その火山岩の瑰偉変幻なる所、活火山の雄絶壯絶にして天地間の大観を極尽する所に到りては、いまだこれを写さざるなり、詩客、画師、彫刻家もまた多く然り、これ千古の遺憾」（志賀 1995：87）や、「天桃白李、嫩緑軟江、佳は即ち佳、しかもこれいまだ諸君子が満腔心血を濺ぐに足らざるもの、諸君子が満腔の心血を濺ぐに足は、彼の水蒸氣にあり、活火山、熄火山、火山岩にあり、流水の激烈なる浸蝕にあり」（志賀 1995：317）といった記述が散見される。
- (5) 志賀の履歴については、昭和女子大学近代文学研究室（1967：143-213）、猪瀬（1979）、山本・上田（1997）他を参照。
- (6) 『日本風景論』出版に到る経緯は、主に猪瀬（1979）、荒山（1991）を参照。
- (7) 志賀 1995：191。以下、『日本風景論』からの引用は特別な必要がない限り、志賀（1995）から行う。
- (8) 志賀 1995：94。
- (9) 志賀 1995：319-320。
- (10) 志賀 1995：321。
- (11) 志賀 1995：325-326。
- (12) 志賀 1995：14。
- (13) 志賀 1995：17。
- (14) 志賀 1995：22。
- (15) 調査した版の所蔵先は次の通りである、初版（1894.10）早稲田大学図書館。再版（1894.12）早稲田大学図書館、第三版（1895.3）国会図書館、第四版（1895.5）国会図書館、第五版（1895.8）早稲田大学図書館、第六版（1896.6）国会図書館、第七版（1896.12）東洋大学図書館、第八版（1897.5）稿者所蔵、第十版（1899.8）東洋大学図書館、第十三版（1901.7）青山学院短期大学図書館、第十四版（1902.4）明治大学図書館、第十五版（1903.6）早稲田大学図書館。  
なお、挿図の中でも装飾的なカットに類するものは本稿では考察の対象外とした。また、一覧表とした挿図の他に、折り込み図として「千島列島」（表）「日本国ノ火山」（裏）が、これは学術的な模式図にあたるものとしてこちらも考察の対象外としている。米地（1999）によれば、この「千島列島」の火山図は、地質学者J. Milneの論文から剽窃されているという。
- (16) 志賀 1995：10。
- (17) 樋畑の履歴については、向後恵里子（2002）を参照。
- (18) 金子（1992）によれば、海老名明四は東京美術学校で浅井忠の教室に学んだと推測されている。1900年7月に美校を卒業後、1906年から1908年まで曹洞宗第一中学林に図画教員として勤務している。
- (19) 明治美術会（1991）の名簿に記されるところによれば、この時海老名は明治美術会の通常準会員となっていた。住所は「本郷区駒込吉祥寺内」とある。
- (20) 表に名前の挙がっている彫師のうち、森川天葩は明治の教科書挿絵などを数多く手掛けていることで知られ、後にも志賀の著書『河及湖沢』の挿図制作に関わっている（青木 2000）。
- (21) 追加された挿図のうちサインが認められるのは1点のみであるが、画風から2点とも中村不折の作と判断した。図に掲出したのはサインのある「越ヶ谷附近の春色」である。
- (22) 中村不折顕彰会編（2002）および長野県伊那文化会館編（2006）。
- (23) 青木茂によれば、「風景」と題した作品が明治美術会展覧会に現れたのがこの年である（青木 1996：65-66）。
- (24) 泰井（2003）および同カタログ掲載の中村不折の作品を参照。
- (25) この折り込み図にもサインは見あたらないが、タッチおよび図中の文字の筆跡から同じく中村不折の作と判断した。
- (26) 後藤 1931：139-140。
- (27) 近藤（1995：389-390）および島本（1986：18）。
- (28) 米地 1996。

## 【参考文献】

青木茂

- 1991 『明治美術会報告』解説『明治美術会報告』第1巻（近代美術雑誌叢書6）3-17、東京：ゆまに書房  
 1996 『自然をうつす』（近代日本の美術8）東京：岩波書店  
 2000 『木口木版いろいろ』『町田市立国際版画美術館紀要』4：17-28

- 荒山正彦  
 1989 「明治期における風景の受容—『日本風景論』と山岳会」『人文地理』41-6、63-76  
 1991 「明治期における英文日本旅行案内書の刊行—明治初期地理学史の一側面—」『大阪大学 日本学報』10：123-139
- 猪瀬直樹  
 1979 「志賀重昂と『日本風景論』」『覆刻 日本風景論』29-123、東京：飯塚書房
- 大岡信  
 1988 『現世に謳う夢—日本と西洋の画家たち』（中公文庫）、東京：中央公論社
- 大室幹雄  
 2003 『志賀重昂「日本風景論」精読』（岩波現代文庫）東京：岩波書店
- 勝原文夫  
 1979 『農の美学』東京：論創社
- 加藤典洋  
 2000 『日本風景論』（講談社文芸文庫）東京：講談社（単行書は1990年刊行）
- 金子一夫  
 1992 『近代日本美術教育の研究—明治時代—』東京：中央公論美術出版
- 亀井秀雄  
 2003 「日本近代の風景論—志賀重昂『日本風景論』の場合」小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝編『岩波講座 文学7 つくられた自然』17-41、東京：岩波書店
- 柄谷行人  
 1988 『日本近代文学の起源』（講談社文芸文庫）東京：講談社（単行書は1980年刊）
- 黒岩健  
 1979 『登山の黎明—「日本風景論」の謎を追って—』東京：ペリかん社
- 向後恵里子  
 2002 「逋信省発行日露戦役記念絵葉書について」（早稲田大学大学院文学研究科修士論文）
- 小島烏水  
 1995 「〔岩波文庫初版〕解説 志賀重昂『日本風景論』（岩波文庫）368-382、東京：岩波書店（初出は1937年）」
- 後藤狂夫  
 1931 『我郷土の産める世界的先覚者 志賀重昂先生』東京：警眼社・松華堂
- 小松義正  
 1957 『山と書物』東京：築地書館
- 近藤信行  
 1995 「解説」志賀重昂『日本風景論』（岩波文庫）383-395、東京：岩波書店
- 志賀重昂  
 1894 『日本風景論』東京：政教社  
 1995 「日本風景論」志賀富士男編『志賀重昂全集』第4巻 復刻版 東京：日本図書センター  
 1995 『日本風景論』（岩波文庫）東京：岩波書店
- 島本恵也  
 1986 『山岳文学序説』東京：みすず書房
- 昭和女子大学近代文学研究室  
 1967 『近代文学研究叢書』第26巻：143-213、東京：昭和女子大学近代文学研究室
- 千田稔  
 1988 「『風景』のナショナルリズム」『奈良女子大学地理学研究報告』Ⅲ：127-143  
 1998 『風景の文化誌Ⅰ—都市・田舎・文学—』東京：古今書院
- 泰井良  
 2003 「道路山水と風景画について」静岡県立美術館・府中市美術館・長野県信濃美術館・岡山県立美術館編『もうひとつの明治美術—明治美術会から太平洋画会へ』展図録：20-23
- 高階秀爾  
 1990 『日本近代美術史論』（講談社学芸文庫）東京：講談社（単行書は1972年刊）
- 田中淳  
 1988 「序論—明治中期の洋画」東京国立近代美術館『写実の系譜Ⅲ 明治中期の洋画』展図録：11-24
- 徳富猪一郎  
 1898 「碌堂と矧川」『漫興雑記』（国民叢書第14冊）81-85、東京：民友社
- 長尾正憲  
 1937 「志賀重昂と地理学」『地理学』5-4：174-186  
 長野県伊那文化会館編

- 2006 『生誕140年 画家・書家中村不折のすべて展』伊那：中村不折のすべて展実行委員会・長野県伊那会館・信濃毎日新聞社
- 中村不折顕彰会編
- 2002 『中村不折秀作集』飯田：新葉社
- 前田愛
- 1978 『幻影の明治』（朝日選書）東京：朝日新聞社
- 松田道雄
- 1959 「日本の知識人」『知識人の生成と役割』（近代日本思想史講座4）11-57、東京：筑摩書房
- 松本誠一
- 1994 「風景画の成立—日本近代洋画の場合—」『美学』178：56-66
- 三田博雄
- 1973 『山の思想史』（岩波新書）東京：岩波書店
- 源昌久
- 1975 「志賀重昂の地理学—書誌学的調査—」『Library and information science』13：183-204
- 村上敬
- 2003 「志賀重昂『日本風景論』と明治20年代の油画について」『文芸学研究』7：70-87
- 明治美術会
- 1991 「明治美術会会員名簿」青木茂監修 『明治美術会報告』第4巻、東京：ゆまに書房（原本の刊行は1900年）
- 森谷宇一
- 2002 「志賀重昂「日本風景論」を読む」『文芸学研究』6：1-63
- 山本教彦・上田誉志美
- 1997 『風景の成立—志賀重昂と「日本風景論」』大阪：海風社
- 米地文夫
- 1989 「J. ミルンの地理学、特に地形学における史的意義—志賀重昂とのかかわりを中心に」『日本地理学会予稿集』35：284-285
- 1990 「志賀重昂『日本風景論』の分析—火山に関する剽窃と国粹主義の関係—」『日本地理学会予稿集』38：46-47
- 1996 「志賀重昂『日本風景論』のキマイラ的性格とその景観認識」『岩手大学教育学部年報』56（1）：15-34
- 1999 「北日本の火山に関する志賀重昂『日本風景論』の記載—剽窃とその背景としての政治的意図」『総合政策』1（4）：477-488